

## 仏教文化のなかの琉球の御拝ツツ

石川恵吉

琉球には、＜御<sup>ミハイ</sup>拝ツツ＞といわれる一つの文学ジャンルがある。御拝ツツとは、現在琉球国王や王妃等に対して王府の公事を誠心誠意勤める上級官人の誓い、すなわち「誓詞」と理解されているものである。これまでの御拝ツツ研究では、琉球文学という限られた範囲の中でその語義や内容が解釈されてきた。本発表では、こうした従来の「琉球の御拝ツツ」という視点を更に広げ、御拝ツツを仏教文化のなかの変容文学として新たに捉え直し、再定義することを試みるものである。

御拝ツツは、これまで田島利三郎や加藤三吾、伊波普猷、池宮正治、島村幸一らによってその存在が報告され、琉球文学の中に位置づけられてきた。最新の研究では2021年に島村が自身の調査成果をもとに「琉球の御拝ツツ」（『沖縄文化研究』48）と題して、その現存状況や形式・内容、さらに文学ジャンルとしての御拝ツツの位置づけが示されたところであるが、その基本的な考え方は先の論文題目から窺えるとおおり、「琉球」という枠組みの中で捉えているところにポイントがある。だが、発表者はこの琉球の御拝ツツは13世紀半ばより続く仏教文化に起源にもつ文学として捉え直すことができるものと考えている。

例えば、これまで御拝ツツの語義は琉球歌謡における「つゝ」の用例を通して「聖なる言葉、特殊な言葉」の意と解されてきたが、これは王府管轄の公的な社寺に札とともに献上されてきた「御配<sup>ミはいちつ</sup>帙」に由来する名称であろう。帙とは、元来書物などを保護するための包み紙のことで、それには社寺に献上する願文や祝文等が入っていた。御拝ツツは書承形式のもので、儀礼の場面では読み上げる形をとる。内容は、国王への感謝に始まり、国王の長寿、王子王孫の多幸の願いを中心に述べられるが、それは正月を中心に行われる社寺参りで「国王聖躬万々歳、御子孫繁栄、国家安穩」を奉る祈願の趣旨と重なる。また、御拝ツツはそのほとんどが失われており残っていない。その背景には、仏教の御配帙が後に焼却されるという事情が関わっておりものとみられる。

## はじめに

元旦の朝、首里城正殿の御庭に王子をはじめ諸侯諸士が列席し、国王が出御する。その時、一人の三司官が前に歩み出て、次の口上を述べた<sup>1</sup>。

【資料 1】みほみのけやへら、年はしめ朔日の御祝に、おみてつころちやう御立めしやうちへ、真正面の御座敷おかまれめしやうれハ、おま人しつかい御拝おかて、すてらせしむしやうちへ、下こおりの御座敷おちよわいめしうれハ、按司かなした、国々の按司へ、三番の親方部、さはくり／＼、御近ク拝てすてらさしむしやうちへ、おの上に御さむたいの御酒・御茶おたほひめしやうれハ、もゝすてすてらさしむしやうちへ、此こをんたうとさや、首里かなし天のともゝととひやくさ、おかまれめしやうるおかほう、思こわおすてものゝ、ともゝすへのおかほうと、夜もひるもかめねかへ、しめさしむしやうちをて、ミおやたいりやきもすい、たい添からめち、ミおやしめさしむしやうんたいと、しつかいのミはい、おかまさしむしやへる思事

本発表でとりあげる御拝ツツ<sup>ミハイ</sup>の一例である。内容は「年頭の御祝いに、合掌する貴人達が列席され真正面の御座敷（正殿）を拝見すると万人すべてがそのお恵みに浴し、また国王様が下庫理の御座敷に出御なさると、按司様、国々の按司、三番の親方、サバクリたちがお近くで拝謁しお恵みに浴しようとしています。この上おさがりの御酒・御茶を下さって多くのお恵みに浴しようとしています。この御恩の尊きことは国王様が千年・千歳まで拝まれて下さる御果報でございます。また、世子世孫の千年の末までの御果報こそあれば夜も昼も神願いをして御公務は心と身を添えて懸命に勤めて参りますとの皆の願いです。拝受して下さいとの思いです」というものである。御拝ツツについては、田島利三郎、伊波普猷、加藤三吾らによってその存在が報告されてきたが、新たな資料の発見がなかったため、これまで本格的な研究は進んでいなかった。そのような中、2021 年に島村幸一が自身の調査成果を基に「琉球の御拝ツツ（ミハイツツ）」（『沖縄文化研究』48）を発表し、現存する御拝ツツの状況・内容・形式が一覧できるようになり、その性格がみえてきたところである。

これまでの御拝ツツ研究では、島村の論文題目からも窺えたとおり「琉球」という地域に限定された文学として御拝ツツは捉えられてきた。しかし、発表者はこの琉球の御拝ツツは 13 世紀中葉より続く仏教に起源をもつ文学として捉えられると考えている。本発表では、その自説について御拝ツツという語およびその歴史的機能の検討を中心に論述する。

## 1. 先行研究の整理

御拝ツツという語およびその機能については、田島・加藤・島村が言及している。田島は、

---

<sup>1</sup> 豊見山和行 1990 「＜史料紹介＞琉球国王家年中行事 正月式之内」（『浦添市立図書館紀要』第 2 号、浦添市立図書館）の報告がすでにあるため、本稿ではそれを基にした。

御拝ツツを「上に対して謝恩の意を述べる時に用ふる」とし、「城中の、儀式の時に言ふ或る定められたる言葉をも、御拝つづといふ」と述べている<sup>2</sup>。田島のいう「上」とは、琉球国王を始めとする国の上級官人を指す。次の加藤は、ここでいう御拝ツツを「をがんつゝ」と称し、「城中で祝の儀式に、神職が神に謝する詞」と捉えた<sup>3</sup>。続く島村は、御拝ツツの「ツツ」の語義をおもろさうし等の歌謡にみえる「つゝ」の用例や、それとの関連語句から「聖なる言葉、特殊な言葉」の意とし、その機能は国王や王妃等に対する王府の公事を誠心誠意勤める上級官人の誓い、すなわち「誓詞」にあるとした<sup>4</sup>。御拝ツツは、謝恩の意を述べるものなのか、それとも公務遂行の誓詞なのか。また、御拝ツツを奏上する対象は、国王をはじめとする上級官人なのか、それとも神なのか、見解が分かれている。

## 2. 「御拝ツツ」という語をめぐって

先行研究や既刊の報告書等で示されている御拝ツツは、重複を除くと計6点<sup>5</sup>にのぼる。そのうち時代が特定できるものは1840年から1860年代にかけてのものである<sup>6</sup>。今回、それを更に遡る1513年の御拝ツツが新たにみつかった。それは『宮古島旧記』『金志川城』の由来譚に記されているものである。それには、城主の金志川豊見親が「(大明)正徳八年」に琉球(首里)へ「上国」した際、沖縄島で「国土安穩、船路」のために「大般若経六百巻御祈念」の「みはいつゝ」を奉って頂戴し、宮古へ「持下」、それを子孫に申し伝えて今に至るというもので、記事のあとに次の資料2が添付されている。

資料2は、「大明正徳八年」に、仏教の經典の中で最も勝れている「大般若経王」に「天長地久」「御願円満」「船中吉祥」を祈念した祈祷札(紙札)である。『宮古島旧記』には諸本<sup>7</sup>があり、田島本には「みはいつゝ」と出て、その他は「はいつゝ」と出る。この「みはいつゝ」の「み」は丁寧の意を表す接頭辞の「御」であろう。では、続く「はいつゝ」とは何か。

仏教関係の資料に目を向けると、金志川豊見親が持ち帰った「みはいつゝ」と同じ書誌形式の祈祷札が日本の寺院に残されている。資料3はその一例である。ここで注目されるのは、酷似する書誌形式もさることながら、この祈祷札を「<sup>はいちつ</sup>配帙」と称している点である。配帙とは、元来、送られる祈祷札を保護するための包みのことで、札の別称でもある。つまり、琉球に伝わる「みはいつゝ」は、この「配帙」を起源とする語であったことが考えられる。本来はミハイツツではなく、ミハイツツと発音していた可能性が高い。さらに、正史の『琉球国由来記』(1713年)『琉球国旧記』(1731年)等には、配帙の登場する儀礼がいくつか記録

<sup>2</sup> 田島利三郎 1924『琉球文学研究』青山書店、p.20 参照。

<sup>3</sup> 加藤三吾 1907『琉球の研究』私家版、p.5 参照。

<sup>4</sup> 島村幸一 2021「琉球の御拝ツツ(ミハイツツ)」(『沖縄文化研究』48、法政大学沖縄文化研究所) 参照。

<sup>5</sup> 内訳は『聞得大君御殿御願公事帳』所収の1首、『冊封謝恩御使者渡唐日記』所収の2首、「琉球国王年中行事正月式之内」所収の1首、『恵姓家譜(六世友良)』所収の1首、『百浦添御普請日記』所収の1首である。なお、これらの具体的な資料は島村 2021 に紹介されている。

<sup>6</sup> 『百浦添御普請日記』は1846年、『冊封謝恩御使者渡唐日記』は1866年の成立である。

<sup>7</sup> 管見の限り仲宗根本・多良間本・忠導姓本・中野本・田島本がある。

されている。それは、①12月下旬の「歳末配帙献上」、②正月元旦の「配帙献上」、③正月甲子の日の「御甲子御祈念」である。『琉球国旧記』では、①の儀礼は官寺の円覚寺で幸福を祈る修法を催し、配帙を「内院」へ献じるとあり、②の儀礼では官寺の僧が各寺に於いて元旦から三日まで経を念じ幸福を祈願して配帙を「王」に献じるとある。配帙は、国王へも奏上されていたのである。さらに、③の儀礼では配帙を献じる対象は不明だが、その祈願内容は「聖躬万歳、子孫繁栄、国泰民安之洪福」であった。資料1の内容と近似していて注目される。これらのことから御拝ツツは、仏教語の配帙に由来する語であり、かつては官寺の僧が船路の航海安全や国土安穏を祈念する祈祷札としての機能を備えていたのである。

【資料2】『宮古島旧記』

朱印

謹敬白

願大盤若経王 六百卷

初百内 式百内

参百内 肆百内

伍百内 陸百内

右祈念者

天長地久 御願円満

船中吉祥処也

大明正徳八年八月吉日

【資料3】『東福寺文書』(2-425)

御祈禱配帙

圓通懺摩

大蔵尊経

尊勝陀羅尼

(中略)

右、攸祈者、

大檀那甲辰丙子 国土安泰 家門繁栄

壽山彌聳 福海益深

寛政三年辛亥

□□□□正月吉辰 住持龍育敬白、

### 3. 御拝ツツのもう一つの機能

次に、時代は下って現在報告されている18世紀半ばの御拝ツツの機能について考えてみたい。これまでに知られている6点の御拝ツツを分析すると、物事が始まる或いは改まるその時に御拝ツツが登場するという特徴がみえてくる。例えば、冒頭で紹介した「琉球国王年中行事正月式之内」所収の御拝ツツは、歳首、つまり暦の改まる時であった。次の『冊封謝恩御使者渡唐日記』所収の二つの御拝ツツはいずれも琉球から中国へ謝恩使が派遣されるのに先立って行われた渡唐儀礼の「旅御拝」(旅の祈願。島村は国王からの辞令交付式と捉えている)と、その壮行会にあたる「御茶飯」の儀礼で述べられたものである。これは事始め、つまり中国への旅が始まる時である。また、「年頭御使者并思弟部按司親方部一同三平等の御願の時公事の御拝つゞ」は先の旅儀礼と同様に、年賀を祝う琉球使節が薩摩へ派遣される時に述べられたものだろう。さらに、『恵姓家譜(六世友良)』『久高島由来』所収の御拝ツツは、久高島での国家祭祀が終り、国王一行が久高島を出て与那原から首里へ戻るまでの帰路の安全を祈願したもので、恐らく国王一行が首里へ出発するその時に述べられたものであろう。また『百浦添御普請日記』所収の御拝ツツは、首里城正殿の改築が終わり、完成したその時に述べられたもので、物事の改まりである。このように見ていくと、18世紀半ばの御拝ツツは〈物〉や〈事〉さらに〈時〉の改まりに登場することがわかる。

さて、御拝ツツという語が仏教語に由来することを踏まえて、その周辺にある資料を探っ

ていくと、日本の寺院で配帙と同様に作成されていた「吉書」の存在に気がつく。次の資料4は、京都の東福寺に残る1806年の「吉書案」(『東福寺文書』2-472)である。

【資料4】東福寺吉書／天下泰平、国土安穩、寺門繁昌砌也、當寺領賀州熊坂庄・周防國得地三箇〔村〕并諸庄園豐饒、而所全寺務也、殊新御寄進地有之、任先例米錢□、毎日令寺納、富貴萬福、千喜萬悅、千秋萬歲、千穗萬歲／文化六己巳年正月十一日

内容は「神仏のお陰で天下泰平、国土安穩、寺門繁昌だ。当寺領の賀州熊坂庄や周防國の得地である三か村ならびに諸庄園も豊饒だ。そうしたところはすべて寺の務めである。殊に新しき御寄進の土地があり、任は先例のとおり米錢を毎日仰せの寺に納めることである。富貴萬福、千喜萬悅、千秋萬歲、千穗萬歲を祈念する」というものである。この吉書と資料1の御拝ツツはとても近い関係にある。それは、①吉書と御拝ツツは奉る対象が神仏か国王かといった違いはあるが、共に尊いものとして崇め奉り、その恵みに浴しようとする觀念が背景にあること、②自らに与えられた義務(勤め)を果たすことが述べられていること、③両者ともに「正月」という暦の改まりが重要視されていることである。『日本史大辞典』(1995年、平凡社)によれば、吉書とは「吉日を選んで奏覧に供する文書」で「年始、政始、元服、改元、移徙、任官、内覧始、着陣始、喪服解除など、ことの改まったときに奏せられる」と説明されている。まさに、ここで見てきた御拝ツツの機能と一致し、御拝ツツが吉書としての役割をもっていたことが確認できる。

## おわりに

以上のことから、琉球の御拝ツツは仏教文化の流れのなかに位置づけられる文学として捉えることができるだろう。ところで、先にみてきたとおり15世紀の御拝ツツは漢文で書かれ、18世紀の御拝ツツは琉文(仮名文)で書かれているのはなぜか。歴史学の荒木和憲は、14世紀頃の「琉球禪宗の興隆の背景に日本の(京都)五山系<sup>8</sup>禅僧との交流」があるとし、「尚真代後半以降、王権の支配理念が東アジアの普遍的なものから琉球固有のものへと転換」していく中で「仮名文が漢文に優越するという現象」が起こったことを指摘している<sup>9</sup>。荒木の論に従えば、この文体の差異は当時の王権の支配理念の変化が関わっていることになる。

<sup>8</sup> 京都五山とは天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺のこと。

<sup>9</sup> 荒木和憲 2021「古琉球期王権論—支配理念と「周縁」諸島」(村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集、国立歴史民俗博物館)